



渡辺有而教授近影

渡辺有而先生をお送りする

武 市 修

渡辺有而先生は1982年4月に教授として前任校の神戸商船大学(当時)より関西大学文学部へお越しになった。その7年前からすでに非常勤講師としてドイツ語を担当され、1980年からは大学院前期課程(当時)においてドイツ語学を講じておられ、その熱心な教育、厳密な学問的営為を高く評価した寺川先生の強い要請によって本学にお招きしたのであった。以来24年の長きにわたり文学部独逸文学科(当時、現ドイツ語ドイツ文学専修)で教育・研究に全力を尽くしてこられた。厳しくも愛情に満ちたその指導ぶりは夙に知られており、多数の優秀な学生を育て世に送り出された。また、先生の学問研究はきわめて広く、かつ深く、ギリシア語、ラテン語にまで遡り、ゲルマン語の諸現象を幅広く究明される業績は知る人ぞ知るで、ドイツのグンター・ナル出版社から出ているLinguisten Handbuch『言語学者便覧』第2巻に日本を代表するゲルマニストの一人として紹介される榮譽に浴された。

先生のご研究の出発点は先ずドイツ文学の領域で、写実主義の時代の最大の劇作家ヘッベル、鬼才ビューヒナーの「悲劇性」を扱われたあと、レッシング、ティークなど啓蒙主義、ロマン主義にまで考察の目を広げられたあと、その関心はさらに言語現象に向かった。ドイツ語は造語機能の豊かな言語であるが、先生は分離・非分離動詞から形容詞、名詞の造語構造を統計的に明らかにされ、その生成の可能性にまで言及し、新しい造語理論を提唱され、その理論は斯界の注目するところとなった。

その後もこの方向で研究を深められる中で、ドイツ語のより古い言語段階にまで遡り『ヘーリアント』を中心とする古ザクセン語、オトフリートの『総合福音書』を中心とする古高ドイツ語の格体系のあり様、とりわけ具格に注目し言語史的考察を加えられる。その源をたどるべく先生のご研究はさらにギリシア語、ラテン語へと深められたのは必然の結果であった。

先生はまことに意志の強い方である。何度か大きな病を得て入院されたが、その都度それを克服され乗り切られた。ふつう人はそのような状況では次第に氣力が萎えていくものであるが、先生は驚くべきことに、逆にますます学問的情熱を燃やされ、そのご研究はいよいよ深みを増し、それとともに学生の教育にもいっそう精魂を傾けられた。先生が学生によく語られる持論は「日本の文化を知らずして外国のことなど分からない」ということである。それに触発されて、日本の代表的な古きよき文学、伝統的な文化に関心をもつ学生は先生の該博な知識と指導力に惹かれその門をたたいた。そしてそこから、例えば『源氏物語』や『枕草子』あるいは井原西鶴の『春雨物語』などを取り上げ、それらのドイツ語訳や英語訳を比較して、その優劣を一定の基準に則して判定するなどの、まさに先生のゼミならではの卒論が数多く生まれた。

京都の旧家のご出身で水戸藩士の流れをも汲むお血筋の先生は、教育・研究のみならず趣味の世界でも一流である。名剣士であるとともに金剛流能楽の師範でもあられる。これはもう趣味と言うより専門家である。フランクフルト・ゲーテ大学に留学しておられたときにはインターナツィオーネスの通訳の資格も取られた由、何をしてもその道を徹底的に極められる先生の集中ぶりにはまさに脱帽するほかない。

国立大学が独立行政法人として独立採算を強いられることに象徴的に見られるように、企業の競争原理が大学運営に持ち込まれ、目に見えた数値でしか物事の価値を判断しない風潮がますます広まる中、「無用の用」を説くべき文学部もその浪に押し流されつつある。それだけに今こそしっかりと物事の根本を見据え、非合理的な人間を多面的に究明する文学部の役割が重要なときはない。このような状況の中で表面的な現象を追うのではなく、真に学問的な姿勢を貫く先生のような方を定年とはいえ、送り出さなければならないのは残念極まりないが、これも致し方ない世のならいである。しかし先生にはこれからも大所高所から頼りない後輩に苦言を呈していただくようお願いしつつ、とりあえずお別れをしたいと思います。今後ともくれぐれもお体を大切になさって、ご研究をますます深められますよう祈っております。